

J-51

地方財産を守る
—だんじり博物館の計画—
Local assets to be protected
- Planning of Danjiri Museum -

○岩本桃果¹, 佐藤信治²
 *Momoka Iwamoto¹, Shinji Sato²

My local, in Saijo City, Ehime Prefecture, Autumn Festival will be held in October every year. Saijo Festival is a festival of pleasure and human sacred without change age-old intertwined well. I plan the museum store as a property of the earth relationship of people, goods of this festival.

1. はじめに

私の地元愛媛県西条市では、毎年10月に秋祭りが開催される。西条祭りは、古来変わりなく神聖なもの人間の快樂がうまく絡みあう祭礼である。この祭りの人・モノの関係を地の財産として保管する博物館を計画する。

2-1. 西条祭りとは

愛媛県西条市で行われる秋祭り。日本を代表する多くの祭りが、街の空洞化・住民の都会への流出・少子高齢化・過疎化などにより形骸化、あるいは行政とタイアップされ観光イベント化していく中、西条祭りは現在でも古来からの伝統に則りあくまで地元の氏神と氏子の神聖な神事として催行され存続してきた。基本的なストーリーは、氏子たちが五穀豊穡の神を地元に招き、最後に加茂川にてご神体との別れを惜しむ。



Figure1. State of the festival in Kamo River

2-2. 市民にとっての祭り

西条市民は本当に祭が好きで、1年中祭の話をしてもし尽きないほどだ。故郷を離れ遠方に移り住んだ者に

至っては、冠婚葬祭・盆や正月にすら帰郷しない者でも、年一度の祭りにだけは万難を排してかならず帰郷する。西条市民には「祭りがしたいから西条に残った」、と公言する者も多く、地方祭休日があるかどうかで就職を決めたり、他所に出ても祭りのために仕事を捨てて西条に帰ってくる者すら多く存在する。この土地柄ゆえ「一年は祭りに始まり、祭りに終わる」という古くからの気質が地元人の中に定着している。

では、西条市民にとっての祭りの魅力とは何か。町内揃いのはっぴとねじりはちまきを着用し、ガラガラに枯れた声を振り絞りながら楽車をかつぐ。これに西条の人は、一種の“快感”のようなものを感じる。老若男女関係なく肩を組み合い酒を囲んで歌いだす。まさに皆が一体となり「まつり」という時を過ごし、ともに感じる。それが実にいいのだ。



Figure2. Festival in front of the former site of Saijo Jinya

1 : 日大理工・海建、Undergraduate student, Dept. of Oceanic Architecture & Eng. CST, Nihon Univ.

2 : 日大理工・専任講師・海建、Assistant Prof, Dept. of Oceanic Architecture & Eng. CST, Nihon Univ.

3-1. 城下町・水の都、西条市

1636年（江戸時代）伊勢神戸の城主一柳氏が西条藩主となり、二代直重が陣屋を築造し城下町が開かれた。その後1670年、松平頼純（徳川家康の孫）が藩主となり、約200年間、西条市は三万石の城下町として栄えた。現在の西条陣屋跡には西条高等学校が建つが、今でも水堀や石垣、大手門などが残り、高貴の雰囲気を保っている。

また、西条市は四国脊梁石鎚山系を水源とする豊富な地下水が自噴し四季を通じて尽きることがない。陣屋跡の水堀も、石鎚山から流れる水源である。

3-2. 敷地について

現在は西条高等学校が建つ、旧西条藩主邸跡を計画地とする。城下町であることから旧西条藩主邸跡は地形的に町の中心地であり、またこの付近は市役所や生鮮市場、商店街などが集積する、地域の核ともいえる場である。そしてなんといっても、祭りの最終日の早朝に、だんじりが現在の西条高校をぐるりと囲むお堀端に集合し、西条藩主に祭礼を奉納していた伝統に則り、大手門前で屋台の練りと神楽を奉納する。



Figure3. Former site of Saijo Jinya, and its surroundings



Figure4. Symbol of Saijo City Otemon



Figure5. Map around the site

4. 計画

西条市民にとって祭りは、生命力の再生と共同体の絆の回復をめざす祭礼であり、言い換えれば、人間再獲得の（己を取り戻すための）儀式である。西条市民にとって、祭りとは地の財産であり、またこの財産を守ろうとする意識も高い。西条祭りは、古来変わりがなく神聖なもの人間と人間の快楽がうまく絡みあっているのである。それらを介すものは、だんじりという媒体（もの）であると読み取る。

旧西条藩主邸跡（現在の西条高等学校敷地）に、地の財産を守る博物館を計画する。ここでいう地の財産とは、城下町としての価値、水に特化した生活、西条祭りの3つである。この3つを融合した博物館の計画である。

市民に開放された場とするため、水を介在させた庭園を有する博物館としたい。建物は木造とするが、内部は祭りの豪華絢爛さを演出する。外部には柔らかく揺れるほのかな明かりが漏れ、提灯に照らされた祭りの風景を幻想させる。人・モノ・風景を大事にしつつ、3つの財産を集積・保管する。

5. 参考文献

- [1] 吉本勝「続・西條のおまつり」平成 23 年 9 月
- [2] 西條史談会「西條史談」No.71, 平成 19 年 9 月
- [3] 西條史談会「西條史談」No.83, 平成 23 年 9 月
- [4] 朝日新聞「屋台だんじり、熱気が川面照らす 愛媛・西条まつり」No.83, 平成 23 年 10 月 17 日